
デバイスになった少年

ザムジード

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デバイスになつた少年

【著者名】

ザムジード

N1683V

【あらすじ】

なのはを助ける為に瀕死の重傷を負つてしまつた少年の運命とは?
?

突然の悲劇

僕の名前は、神童拓真です。

拓真 side

今日は、僕の幼馴染である高町なのはと、お買い物デートをしていました。

「拓真君は、どっちの服が好き?」

なのはは、僕に2着の服を見せて、僕に選ばせていた。

「僕は、右側の服を、選ぶなのはは、笑顔をで、僕にこう言つた。

「さすが拓真くん私の好みよく知つてるね」

「それは当然だよ僕たちは、幼馴染でずっと何をするにも、一緒だつたしそれに、なのはは、僕の・・・だしね」

僕は、なのはの質問に対し、顔を赤くしながら答える。

「なーに拓真君最後のほうなんて言つたの?よく聞こえなかつたよ

なのはが僕に近づいて、こう言つた。

「拓真君教えてよ」

僕となのはは、そんな他愛のない話をしながら家に、帰つていると突然なのはが走り出したのだった。

僕が、あわててなのはを追いかけると、そこには、車道に小動物がいた。

なのはは、小動物を助けると安堵し、歩道に戻らうとした時、突然なのはのほうに、居眠り運転のトラックが進入してきたのだった。

「キヤアアアアーー」

なのはは、自分に突っ込んでくるトラックを見て、恐怖で体がうごけずにいた。

「私死ぬんだ。お父さんお母さんお姉ちゃん 拓真君ごめんね私拓真君のこと大好きだつたよ」

なのはが覚悟決めた時、なのはを呼ぶ声が聞こえた。

「なのはーー」

僕は、全力で走りなのはに追いつくと、なのはに迫るトラックが見えたので、急いでなのはを助ける為に、行動を開始したのだった。そして、なのはの元に着くと、トラックもスピードを上げて突入してきただつた。

それを見た僕は、なのはを歩道まで、突き飛ばしなのはを助け、なのはの安全を確認した時、僕はトラックに、轢かれてしまった。

拓真 side end

なのは side

「私は拓真君に、歩道まで突き飛ばされると、その後トラックが拓真君を轢いていた。

「いやああ拓真君拓真君」

私は必死に大好きな人の側で、名前を呼んでいたが、次第に拓真君の体が、冷たくなつていいくのがわかつた。

「拓真君死なないでお願い私を一人にしないで——」

私が拓真君を抱えて叫んでいると、その時私と拓真君の周りが灰色の世界に包まれたのだった。

そして、空から一人の少女が降りてきたのだった。

なのは side end

謎の少女

なのはを助ける為に、トラックに轢かれた拓真の生死は？
そしてその直後なのはたちの前に、現れた少女は一体何者なのだろうか？

なのは side

私は、拓真君の近くに行くと、突然私たちの前に、不思議な雰囲気の少女が、現れたのでした。

「あなたは一体何者ですか？」

私は、不思議な少女に聞いた。

「私は、天界から来ました女神のソフィィとおもいます。よろしくお願ひしますね高町なのはさん」

「……どうして私の名前を、知ってるの？」

私が聞くと、ソフィィは答えたのでした。

「それは、私が、あなた達一人の担当ですからね」

「担当？何の？」

「それは、死後の世界に、案内する為ですよ本来ならね」

そう言つてソフィイは、間を少し置いて喋りだしたのだった。

「実は、これからなのはさんあなたには、数々の試練が待つていますが、これからあなたには、質問をします。その返答次第では、拓真さんを死後の世界に送りますので、慎重にそして、素直にに答えてくださいね」

そして、ソフィイからの質問が、私の愛する人の生死を決めるることになつてしまつたのだつた。

果たしてソフィイの質問とは、一体何？

なのは side end

ソフィイの質問

そして、拓真の生死を、決めるソフィイによるなのはへの質問がタイムが始まった。

三人称 s.i.d.e

「それでは高町なのはさんあなたには、いくつかの質問をします。それでは、なのはさんにとって、拓真さんは、どういうひとですか？」

「私にとって、拓真くんは、とても大切な人です。」

「大切といいましたが、どういう風に、大切なんですか？」

「拓真くんが、いてくれたので、私は、お父さんが入院して私以外の家族がお店や、お父さんの看病で、家にいなくて、私は一人でいたとき、私は拓真君と出会い琢磨君のおかげで、私の心は救われたの。だから今度は、私が救えるなら拓真君を救いたい」

なのはは、拓真に対する想いを、ソフィイにぶつけていた。

なのはの想いを、聞いたソフィイは、なのはに最後の質問をしたのだった。

「なるほどよくわかりました。高町なのはさん拓真さんを助ける方法は、ありますがその方法を使用した場合あなたに過酷な運命が、待っていますよ」

「過酷な運命で例えばどういうこと？」

なのははが、ソフィイに聞くがソフィイは答えなかつた。

そして、ソフィイが拓真の体に触れると拓真の体が、光を放ちだしたのだった。

「キヤなにこの光？」

なのはは、強烈な光を浴び、目を開じてしまった。

目を開けたなのはは、驚いていた。自分の横にあつたはずの拓真の体が消えていたからだ。

「ソフィイちゃん拓真君の体が消えたよ」

「心配しないでなのはさん拓真さんはここにいるから」

そして、ソフィイはなのはに、赤い宝石を見せた。

「これで、あなたたち二人は、過酷な運命の中に入つてしまつた。そして赤い宝石になつた拓真さんは、いづれ目覚めるわそれじゃあね高町なのはさん」

そして、ソフィイは赤い宝石となつた、拓真をなのはに渡し、どこかへと消えて行つた。そしてソフィイが消えたことで、なのはは、元の空間に戻つたのだった。

変化

そして、次の日、なのはは、学校に行く為、支度をしていた。机の上には、赤い宝石が、置かれていた。

なのはは、昨日家に帰ると拓真のことと家族に話したのだった。だが家族全員の答えは、一緒だった。

三人称 side

「ねえなのは、拓真君でだれなの？」

「え」

なのはは、家族の答えに驚いていた。なんと、なのはの家族全員が、拓真を覚えていなかつたのだった。

そしてなのはは、昨日まで拓真と一緒に送迎バスを待つていたバス停に着いて、なのはは考えていた。

「どうしてお父さんたちは、拓真君の事を覚えてないんだろう。昨日までは、覚えていたのに」

なのはは考えていたが、答えは出なかつた。そして、清祥大付属小学校行きの送迎バスがやつて来たのだった。
なのはが、送迎バスに乗ると、置くからなのはを呼ぶ声が聞こえてきた。

「なのはおはよっ」

「おはよっなのはちやん」

なのはを呼んだ声の主は、アリサとすずかだった。

「アリサちゃんすずかちゃんおはよっ」

そつ言いながらなのはは、何時もと同じく二人の間にいると二人に拓真の事を聞いたが、二人も拓真の事を、覚えていないのだった。

「「」めんなのはその拓真て誰なの？」

アリサが言つ。

「「」めんなのはちゃん私も拓真君のこと覚えてないんだ」

「どうしてみんな拓真君の事を、覚えていないの？」

なのはは、学校の屋上でつぶやいていた。すると景色が変わり気が付くと、そこに女神のソフィイがいたのだった。

三人称 side end

なのはが、屋上にいると、突然景色が代わり、なのはが目を開けると、そこにはソフィイがいた。

三人称 side

「高町なのはさんじうですか？昨日と違う一回過ごしてみて」

「ソフィイちゃんこれはどいつことなの？何でみんなに、拓真君の記憶がないの？」

なのはは、勢いよくソフィイに、問い合わせたのだった。

だが、ソフィイは、そんななのはの態度は、気にせず、なのはの問い合わせたのだった。

「あれ私前に言いましたよね。拓真さんを救う時あなたたちには、過酷な運命が待ち受けていると、実は、私が、拓真さんを生き返らせるときに、代価として、なのはさん以外の人たちからの拓真さんに関する記憶を貰いましたので、皆さんは拓真さんの事は覚えていなはずです」

そう言ってソフィイは、なのはの質問に答えたのだった。

「あ、でも思い出なんて拓真さんが、目覚めれば新しく出来ますしね」（まあ目覚めたらの話ですが少なくとも、なのはさんが3年生にならないと、拓真さんは目覚めませんが）

ソフィイはなのはにそう語り、帰る準備をしていたのだが、なのはがソフィイに、質問していた。

「ねえソフィイちゃん本当に、拓真君この宝石の中で、本当に生きているの？」

「それは本当に生きていますよ。ただ、まだなのはさんが拓真さんの起こし方を知らないだけです」

「そうですねあと2年待てば拓真さんの起こし方を教えてくれる人が、現れるかもですよ。それでは」

そう言ってソフィイは、消えたのだった。

なのはは、ソフィイが消えてからも屋上にいたが、アリサとすずかによつて午後の授業がある教室へと連れて行かれたのだった。

「後2年か」

なのははそう呟いたのだった。

そして、時は流れなのはたちは、小学3年になった。そして物語は、静かに動き始めてたのだった。

三人称 side end

不屈の心

なのはは、小学校3年になつたある日の朝なのはは、不思議な夢を見ていた。

その夢の内容とは、拓真が、なのはの知らない男の子と、拓真たちを後ろから追いかける黒い影から逃げていた。

そして夢は何時も同じところで終わるのだった。

その時、なのはの携帯がなり、なのはは、起きたのだった。

三人称 side

「ふああ、またあの夢を見たけど、拓真君と一緒に、いる男の子は、一体誰だろう」

なのはは、そう思ひながら、制服に着替え学校に行く為の準備を終え家族の集まるリビングに向かい、朝食を食べて学校に、行く為、送迎バスが止まる停留所に向かうと、すでにバスが来ていたのだった。

「やばい急がないと」

「はあ、はあ、間に合つた」

なのはがバスに乗ると、なのはを呼ぶ声が、聞こえて來た。

「おはよーなのは」

「なのはちやんおはよー」

「あ、アリサちやんすずかちやんおはよー」

なのはに声をかけた声の主は、なのはと拓真の友達のアリサ・バングスと月村すずかだった。

そしてなのはは、二人の間に座ると、いつも首から下げている赤い宝石を、取り出していた。

その時、アリサがなのはに、聞いたのだった。

「ねえなのは、聞いていい? いつも大事に赤い宝石持つてるけど、その宝石どうしたの?」

「これは私の大事な人からの預かり物なんだよ」

「へえそうなんだ」

すずかは、なのはの答えを聞いて納得していた。

そして、学校に着き、授業を受けていた時、なのはは、懐かしい声を聞いたのだった。

（なのは

「……拓真君？ 拓真君どこにいるの？」

「高町さんどうかしましたか？今は、授業中ですよ」

なのはは、先生に注意されてしまった。

「先生！」めんなさい

そして、授業が終わりお昼休みになつて、なのはの周りに異変が起
こり始めていた。

三人称 side end

不屈の心中編

なのはの周りで、起こり始めた異変とは？

その異変が起きたのは、午後の授業の最中だった。

なのは side

私は、午後の授業を受けていると、突然学校内が、ソフィイが、現れるときに、出来る空間に似ていた。

そして、私が学校の外を見ると、黒い影が建物を破壊しながら移動をしていたのだった。

「さやあ、あれはなんなの？」

私が、黒い影の存在を見て、驚いてると私の頭の中に響いてきたのだった。

「助けて」

私は謎の声の正体が気になり、学校を抜け出し、拓真君と共に、現場に向かった。

なのは side end

そのじる現場では、一匹のフュレットが、黒い影の攻撃をかわしな

がら逃げていた。

? ? side

「はあはあ、このままじゃましいこのままだと、やられる」

その時フェレットは、自分が張った結界内で人影を見つけたのだった。

「この世界に、僕の結界に這入れる人がいるなんて、もしかしたら管理局の人かもしれない」

「よしあの人に協力してもらおう」

そして僕は、協力者を探し出した。

? ? side end

三人称 side

なのはは、現場に着き、黒い影により、壊された街を見て、啞然としていた。

「一体あれは何？」

「あなたは、管理局のかたですか？」

なのは考えてえいると、なのはは、声をかけられたのだった。

「え、あやあ」

なのははふいに声をかけられ驚いてしまったのだった。

三人称 side end

不屈の心後編

あなたは誰？

なのはは、一人の少年と、話していた。

三人称 side

「僕の名前は、ユーノです君の名前は？」

「私の名前は・・・きやあ」

その時、なのはに向け黒い影が、攻撃をしてきたのだった。

「！…あぶない」

ユーノは、黒い影からの攻撃から防御魔法を使い、なのはを守つたのだった。その時ユーノは、なのはが首からさげている赤い宝石を見て、驚いていたのだった。

「これ僕の探していたレイジングハートだどうして君が持っているの？」

「え、それは・・・」

なのはが答えに困っているとユーノが、いつ言った。

「レイジングハートが、あるならアイツを封印できるぞ」

「すいませんが封印を手伝ってくれませんか」

「うんいこよそれと私の名前は、なのはだよコーコー君」

「ありがとうなのは」

なのはが、そういつと、コーコーが、笑顔でなのはに感謝の言葉を言った。

「それでコーコー君あの黒い影は、何？」

「あれはジユエルシードの思念体です」

「どうしたらあれを、封印できるの？」

「それには、まずレイジングハートを起動させてください。今から起動パスワード言います。」

「風は空に、星は天に」

「風は空に、星は天に」

「不屈の心は、IJの胸に」

「不屈の心は、IJの胸に」

「IJの手に、魔法を」

「IJの手に、魔法を」

「レイジングハートセットアップ」

なのはがそう言つと・なのはの服装が、代わり白と青を、基調としたバリアジャケットを着ていた。

そして、なのはには、もう一つ嬉しい事が起つていた。

「なのはじめんね今まで、寂しい想いをさせへ

レイジングハート起動させたことによつ拓真の意識が、覚醒したの
だつた。

「行くよなのは僕たちでジュエルシードを、封印するよ」

「うんわかつた拓真君サポートお願いね」

「ああ、それが今の僕の役目だから任せてなのは」

そして、二人は始めての先頭とは思えない速さで、ジュエルシード
シリアルナンバー21を封印をしたのだった。

封印作業を終えたなのは、コーノと、詳しく話をするため近くの
公園に向かっていた。

三人称 side end

なのはとユーノは、夜の公園で、話をしていた。

三人称 side

「ジューエルシード封印手伝いしていただきありがとうございます。
改めて自己紹介をします」

僕の名前は、ユーノ・スクライアです」

「ユーノが、名前でスクライアが、部族名なのでユーノと呼んでください。

「次は私の番だね」

「私の名前は・高町なのはだよ。高町が、家族名でなのはが・名前
だよよろしくねユーノ君」

なのはは、ユーノに、笑顔で握手をしていた。

(なのは)

「あのなのはさんそのレイジングハートを、持っていたんですか?
して、嫉妬をしていたのだった。

「あのなのはさんそのレイジングハートを、持っていたんですか?
それは、2年位前に僕がなくしたんですが、ミットチルダで」

ユーノがなのはに質問しているとなのはは、不機嫌な表情しながらなのはは答えたのだった。

「 もうユーノ君ちゃんと私のことは、なのはて呼んでもよ」

「あ、ごめんなのは」

ユーノは、少し照れながらなのはに謝つていた。

そして、一人は、高町家に、行くことにしたのだった。

なのはは、知らなかつたこの後ユーノに訪れる悲劇を

三人称 side end

ユーノの悲劇

なのはとユーノは、なのはの家に、向かっていた。

なのはの家に着く前に、ユーノはなのはから「こう言われたのだった。

三人称 side

「ユーノ君死なないでね」

「……ちよ、なのはそれはビリツ意味なの？」

ユーノが、なのはに理由を聞こうとした時、なのはが家の玄関を開けたのだった。

そして、玄関からなのはの父親である士郎と、なのはの兄の、恭也が玄関から飛び出して二人は、ユーノに木刀を突きつけ一人は、こう言つたのだった。

「お前はなのはの何だ？」

「なのはは、渡さんぞ」

ユーノは、何が起こったのかわからないまま恐怖の余り体が固まっていた。

その時ユーノに助け舟を出したのは、なのはの母親の桃子と、なのはの姉である美由紀が、士郎と恭也の耳を引っ張り、二人を家の中

に、引きずり込んでいた。

その光景を見てた、なのはは固まつているユーノに、声かけていたのだった。

「ユーノ君大丈夫？」

なのはは、ユーノに声をかけるが、無反応だった。

「なのはこりゃ駄目だとりあえず家にあげないとユーノ死んじゃうよ」

「えーーー」

拓真がそう言つと、なのはは、驚き急いでユーノを自分の部屋に、連れて行きベットで寝かせていた。

ユーノを寝かせたなのは、リビングで、桃子たちと話していた。

「それでなのは、お父さんじやないけどあの男の子とは、何時からの友達なの？」

桃子なのはに聞いた。

「えーと実は」

なのはは、本当のことは、隠しつつ一人が納得できる言葉を選んで二人に伝えていたが、桃子と美由紀には、なのはが嘘をついているのはわかつっていたのだが、二人はそのことには、触れずなのはの

話しを聞いていた。

「なのはもひ今日は遅いかいの話の続きは明日こひしましょひ

桃子はひつひつて、話を終りせたのだった。

「お母さんお姉ちゃんおやすみなさい」

なのははひつひつて、部屋に戻つて行つたのだった。

「ひよひとお母さんひままでこいの？あの子嘘つこひるよそれに
まだ何か隠してるよ」

美由紀が桃子にひつひつが、桃子はひつひつた。

「私は、なのはを信じてゐからあの子が云えてくれる日がくるまで
待ちます。

そして桃子と、美由紀は、それぞれの部屋に戻つて行つたのだった。

三人称side end

魔法少女

なのはが、ジュエルシードを初めて封印した翌日ユーノは目を覚ました。

三人称 side

「うーん」「は？」「どうだ？」「

ユーノは昨日の出来事を思い出していたその時、カチャとユーノのいる部屋の扉が開いた。

「あ、ユーノ君起きたんだね、よかつた」

開いた扉の向こうから女の子の声が聞こえて来たのだった。

「あ、なのはおはよ」「は？」なのは？

ユーノがなのはに聞くと、なのはは答えた。

「ユーノは私の部屋だよユーノ君」

「僕は一体どうしたんだろう？」「なのは僕は、どうしてここにいるの？」

ユーノは、なのはに昨日なのはの家に来た時からの記憶が無かつたので、なのはに聞いていた。

「ユーノ君」めんね昨日は、うちのお父さんとお兄ちゃんが、ユーノ君を、驚かせて」

ユーノは、なのはの話を聞いて、少しずつ思いだしていた。

そして、ユーノは起き上がりなのはに「ひづいた。

「なのは今からなのはが、昨日得た魔法のことを教えるね」

「ありがとうユーノ君」

なのはは、魔法のことを教そわろうとしたとき、なのはを呼ぶ声が聞こえたのだった。

三人称 side end

作「デバイスになつた少年15000P V記念回です
な「作者さん今回は、なんかするの?」

作「正直に言つと、」の作品が、早くも記念回をやるよいつになら
は思わなかつたんだ」

拓真「その理由やはり俺の設定のおかげだと感づ

作「やはづお前もそう感づか、拓真」

「ああ」

？？「つづきもつづきつづくで

？？「私も」

作「あなたたちの出番はまだですよ」

「別にいいや。なあ作者さん」

作「さてこれからデバイスになつた少年の予定ですが、無印編では基本は原作の流れで行く予定ですが、少し、変化するところもあ
ります」

全「これからもデバイスにナツた少年をよろしくお願いします」

なのはは、ユーノに魔法の声尾を聞いたとした時、なのはは、桃子に呼ばれたのだった。

三人称 side

「なのは、ちよつと手伝ってくれない？」

「はーいお母さん。 一体何の用事なんだりつ~あ、ユーノ君は、私の部屋にいてね」

「うふ。 わかつたよなのは」

そしてなのはは、桃子のいるコビングに向かった。

「ユーノがなのはの部屋か、女の子らしい部屋だな」

ユーノは、なのはの部屋で、これからのことと、考えていた。

「これからどうするか?このままなのはを、僕の都合で巻き込んでいいのか?レイジングハートも見つかったことだし、このまま僕がこのままなくなつたほうが、彼女の為じやないのかな?」

「僕と一緒にいるとなのはの平穏な日常が壊れるかもしれないし」

ユーノは、ある決心をしたのだった。

一方なのはは、リビングで桃子とユーノのことを話していた。

「ねえ、なのはあの子は、起きたの？」

「うん、起きたよお母さん」

「そういえばなのはあの子の親御さんは、どうしてるの？あの子家に来た時一人だつたから気になつてね」

「お母さんあの子の名前は、ユーノ君で言つの」

「あら、うなのがわかつたわユーノ君ね。なのはユーノ君を呼んできて一緒に、夕飯食べたいからね」

桃子は、なのはにそう言つと、キッチンに行き、夕飯の準備を鼻歌を歌いながら始めたのだった。

そしてなのはは、ユーノを呼びに行く為自分の部屋に入ると・レイジングハートをユーノが持ち去つうとしていたのだった。

三人称 side end

「ユーノ君何しているの？」

なのは said

私は自分の部屋にはいると、ユーノ君の行動が、私には、不自然に見えたので、私はユーノ君に声をかけた。

「わ、何でもうなのはが戻ってきたの？」

ユーノは、明らかに動搖していたのだった。

(どうしよう本当になのはが、戻ってくる前に、レイジングハートを持つて消える予定だったのに)

私は、ユーノ君が動搖して考へていると私に拓真君の声が、聞こえてきたのでした。

「なのは助けてくれ——ユーノの奴俺を持つてなのはの前から消えるつもりだ」

(えーそれは本当なの？拓真君？)

(ああ、本当だよなのは)

私たちが、念話で話していくとユーノ君が、復活していくのだった。

「ねえユーノ君早くレイジングハートを出してよ」

「え、何を言つてゐのなは僕は、レイジングハートを持つてゐるわけ無いよ」

私は、ユーノ君の言葉なんて、信じていなかつたが下手したら、ユーノ君に拓真君の事がわかつてしまふ可能性が、あつたのでユーノ君にたつた一度のチャンスをあげたのでした。

「ふーんじゃあこれを見ても持つてないて言えるかな? ユーノ君」

私は、ユーノ君にそつと私はレイジングハートセッタアップと言つと、ユーノ君の胸もとが光だし、拓真君が、出てきてB-1を装着しユーノ君にレイジングハート(琢磨君)をユーノ君に突き出した。

「これでも認めないのかなユーノ君?」

なのは side end

このときユーノは直感していた。

なのはに逆らつたら自分は死ぬんだと思つて素直に謝つたが時すでに遅かつた。

じつてなのはこまるパーへのお仕置せん、一晩中続いたのだった。

コーノの悲劇の翌日

なのはは、いつもビビつ、レイジングハートとなつた拓真を連れて学校に来ていた。

一方コーノはなのはのお仕置きの後に、なのはのお願いで、士郎と、恭也によつて、精神を鍛えなおされていた。

三人称 side

なのはが、学校に着くと一台の車の中から声をかけられたのだった。

「なのはおめよつ」

「おはよづなのはちやん」

そして、車から降りてきたのは、なのはの友人であるアリサとすずかだつた。

「あ、アリサちやんすずかちやんおはよつ」

なのはたちは教室に行くと、クラスのみんなが、ざわめいていた。

「ねえ、どうしたの？ 今日みんなそわそわしてるけど？」

なのはが、クラスメイトにみんなが、そわそわしている理由を聞くと、クラスメイトが答えたのだった。

「突然ねこのクラスに、男女の転校生が来るらしいよ高町さん」

「転校生？」

なのはたちは、始めて転校生が来るのことを知ったのだった。

そのじるユーノは一人でジュエルシードを探していたら金髪のに少
年に、出会っていた。

「お前もジュエルシード探してるならお前は俺たちの敵だな」

そいつて少年は「バイスを展開し、戦闘準備を完了させていた。

「君は一体何者なんだ？」

ユーノは謎の少年に問いかけるが、少年は答えないのだった。

謎の少年の正体とは？

三人称 side end

ジュエルシードを探せ2

ジュエルシード探索中に謎の少年に、出会ったユーノだった。

「君は一体誰だ? 何のために、ジュエルシードを求めているんだ?」

ユーノは少年に問いかけるが、少年はこう答えたのだった。

「何だユーノ・スクライアお前」ときが俺に指図するなよ」

少年がやつとユーノは驚いていた。

「どうして? 君が、僕の名前を知っているんだ?」

「俺たちの世界のことなら何でも知ってるんだぜ」

少年は、そう言いながら胸元から、赤い宝石を取り出したのだった。

「……それは」

「行くぜレイジングハートセットアップ」

「了解

そして、少年は光に包まれたのだった。

そのころなのはは、学校に、行っていた。
なのはside

私たちが教室に入ると、クラスのみんながそわそわしていました。だけどその理由は、すぐにわかりました。

「はーい皆さん静かにしてくださいね。今日は転校生を紹介します。

」

「入ってきてくださいね」

先生に言われ、教室に入る少年と少女だった。

私は、この子達を見た時、私に向けられた憎しみに満ちた視線を感じて、私は、恐怖を感じていました。

なのは side end

一方ユーノは、対峙している少年が、なのはと同じ、レイジングハートを持つていること、元気で驚いていた。

「どうして君がそれを使えるんだー」

ユーノは、冷静に考へることが出来ずに、感情的になり、少年に聞いた。

「それは、俺がレイジングハートの持ち主である高町なのはの息子だからだ」

「...」

ユーノは、少年の告白に対し、驚愕していた。

果たしてなのはの息子といつている少年の目的とは。

そして、二人の転校生の正体とは？。

ジュエルシードを探せ③

ユーノはなのはの息子と言っている少年の話を聞いて、驚愕していた。

「何だつて！君が、なのはの息子だつて——」

三人称side

「ああ、そうさ僕の名前は、神童・・・」

少年が、ユーノに名前を伝えようと/or/すると、突然一つの巨大な魔力反応を、感じたのだった。

「これは、ジュエルシードの反応だ」

ユーノは、ジュエルシードを発見したことを、なのはに連絡したのだが、なのはの返事は帰つてこなかつたのだった。

その時謎の少年に念話で声が聞こえてきた。

「やあ刹那元気だつたかい？」

「やはりお前か、悠馬お前までこの時代に、来たのか？どうした？」

「刹那大変だぞ今お前の母さんが、あいつらに捕まつてるぞ」

なのはは、一人の転校生によつて、捕まつっていたのだった。

「何だと」

「刹那まざいぞ早くお前の母さんを助けないと歴史が変わってしまう」

悠馬は、刹那をなのは救出に行かせようとしたが、運悪く、ジュエルシードが、発現を開始してしまったのだった。

ユーノはこの状況を打破できるのか？

三人称 side end

一方なのはと、拓真は

そして拓真となのはは、転校生一人により教室に幽閉されていたのだった。

「拓真くんどうしたらしいのかな？」

「なのはとにかくここを脱出して、ジュエルシードを封印しないと

なのはと、拓真もジュエルシードの発現したのは知っていた。

その時転校生の少女が、なのはたちの前に、現れこいつ言った。

「お久しぶりですねお一人とも」

ジュエルシード探索4

なのはの前に、現れた、転校生の少女の正体は、女神のソフィイだつた。

三人称 side

「あ、あなたはソフィイちゃん！！」

なのはは、転校生の少女の正体が、女神ソフィイとわかり、驚きを隠せないでいた。

「どうしてソフィイちゃんが、こちらの世界に来てるの？」

なのはが、ソフィイに聞くと、ソフィイはこちらの世界に、来た理由をなのはと拓真に伝えたのだった。

「実は、このままだとなのはさんと拓真さんは死んでしまうのです。何者かにより本来の歴史とは、異なってしまったので、我々女神族は、歴史が元に戻る間、私が、ユーノ君の代わりにジュエルシードの探索を行うのでよろしくお願いします」

少し時間は遡りジュエルシードの発見を見たユーノは現場に向かつたのだが、そのジュエルシードは、変異型のジュエルシードだつた。そして、ユーノはジュエルシードに、取り付かれてしまった。

変異型のジュエルシードは、ユーノに取り付くとどこかへと転移をしたのだった。

果たして、ユーノはどこに連れ去られたのか？。

時間は戻り、なのはたちはソフィイの発現を聞いて、大声を出し、驚いていた。

「えーーーユーノ君は、どうしたの？」

なのはの問いに、ソフィイは答える。

「ああ、あの人ですか？あの人は、私たちには、必要ない人ですが、ユーノさんは誘拐されましたよ」

淡々と答えるソフィイに対し、なのははまた大声を出し、驚いていた。

「えーーー」

三人称 side end

刹那と悠馬

刹那 side

俺の名前は、神童刹那10才

「俺は、ある目的のためにこの時代に来た。だがどうやら奴等ももこの時代に、来たらしくなナンバーズの奴等も」

「ただこちらに来たのは俺と俺と戦闘中だった二人だった。

俺は、父さんと母さんが、後に、JF事件と言われる事件後の1年後に俺は生まれる。そして俺が、6才のある事件が、起きてしまう。その事件で、俺は、大事な物を失った

「おじ悠馬本当に、やつらの反応があったのか？」

「うんそれは間違いないよ、4年前にスカリエツティを脱獄させ、刹那の大切な物を、失うきっかけを作り、今まで刹那の母さんと、父さんが解决してきた事件の裏に、潜む组织が暗躍していた。その组织の名は・・・」

刹那 side end

「へ、こじまだ？」

ユーノは田代覚めるとそこは、手術室らしき部屋だった。

「お田代覚めかねユーノ・スクライア君」

突如ユーノのいる部屋全体から謎の声が、響いてきたのだった。

「…誰だ」

ユーノは、謎の声に対し、強い口調で聞いていた。

「今から君には、改造魔道師になつてもいいわぞ」

謎の声は、そつまつと、ユーノの改造手術が開始されたのだった。

「うわあああああやめろ――」

ユーノが大声で叫ぶが、手術は、侵攻していくのだった。

あと残るは、脳改造となつた時、ユーノの前に、刹那と悠馬が、現れた。

「まさか本当に、この時代にも、来るのは、ネオデストロンめ刹那がそう言つと、謎の声が聞こえて来た。

「久しぶりだな神童刹那と、風見悠馬まさか我々を追いかけてくるとはな」

謎の声はそう言つて、二人の行動を褒めていた。

一方なのはたちは学校が終り、帰宅中に、ジュエルシードの気配に気づき現場に向かっていた。

ジュエルシーードと一人の魔法少女

なのは side

私とソフィィちゃんは、学校から帰宅途中にジュエルシーードの発現した時に、出る強力な魔力反応を感じたので、現場に向かうと、そこには、犬の化け物がいました。

「何？あの化け物は」

私が驚き混乱していると、ソフィィちゃんが冷静に私に教えてくれました。

「どうやらあの化け物は、ジュエルシーードがこの世界の生き物に、取り付き凶暴な生き物へと姿を変えたんでしょうね」

「ええ、それじゃどうすればいいの？」

「おそらくですが、ジュエルシーードを封印できれば元の姿に戻れると思いますよなのはさん」

ソフィィちゃんの答えを聞いた私は、拓真君と共に、ジュエルシーードの封印するために行動を開始しました。

この時、私たちは、気づいていなかった。私たち以外の魔法少女の存在に。

「よし、なのは今だ封印を」

「うん拓真君リリカルマジカルジュエルシードシリアルナンバー 1
0 封印」

私は、何とかジュエルシードを封印した時、黒変が起きたのでした。

なのは side end

三人称 side

「ネオデストロンだつて」

ユーノは自分を誘拐した組織が伝説となつていてる組織の名前が同じ
であることに、驚いていた。

「久しぶりだな神童刹那。風見悠馬よ」

謎の声が刹那たちに向け喋りだしたのだった。

「くく、お前たちもこの時代までついてきたのか今我々の作戦が始まるとこだみていくがいい」

謎の声がそう言つとモニターが現れ、そこに移つてるのは、なのはだつた。だが、なのはは、傷ついていた。

「...母さん」

刹那は傷ついたのはを見て、大声で叫んでいたそして、刹那と悠馬は驚いていた。

なのはの相手の姿を見てその相手とは、刹那と悠馬の妹であるヴィオとアインハルトだった。

三人称 side end

親子対決

三人称 side

刹那と悠馬は、ネオデストロン首領の巧妙な作戦により、刹那と悠馬はなのはと引き離されていた。

「何でヴィヴィオと、アインハルトがどうしてこの時代にいるんだ？」

刹那と悠馬は、そう言いながら考えていたが、モニターに写るなのはの姿が、二人に冷静な判断をさせないでいた。

刹那にとつては、親友の妹と自分の妹が、互いに相手を殺す勢いではのにはに攻撃を仕掛けていたからだ。

「きやああああ

「なのは大丈夫？」

拓真は、なのはを心配して声をかける。いつもなら戦闘中に声をかけることが少ない拓真が、なのはに声をかけるということは、なのはの置かれている状況が、厳しいと言つ証拠だった。

「う、うんなんとか耐えたよ拓真君。でも正直ジュエルシードを封印した後だから強い魔法が使えないけど、私あの子達に勝つて見せるね」

なのはは、そう言つとヴィヴィオとアインハルトに向け突撃を仕掛けたのだった。

なのはと、ヴィヴィオがぶつかり合う直前一人の前に現れたのは、あのなのはに恨みを持つ謎の少年だった。

果たして少年はなのはの敵なのか？それとも味方なのか？

三人称 side end

少年の正体

少年 side

俺はこの海鳴市に渦巻く闇の意思を捕獲する為天界から時を越えて、この時代に、やって来た天使なのです。

この時代での情報収集していると、俺は強い力を感じて、その現場に向かうと、なのはと、ヴィヴィオと、アインハルトが、戦っていた。

「何だ模擬戦か驚かせやがって・・・待てよここは過去の世界だよな。なのに、何でヴィヴィオとアインハルトがいるんだ?」

「まさか何者かが送り込んだのか?」

俺は、上空で、なのはたちの戦いを観戦していると、なのはたちの側にいるソフィイから通信が、入ってきた。

「こりゃーあんた一体何者なの?」

俺はソフィイを無視して、なのはの元に行くと、なのはからあなたは一体誰と利かれたので、俺は答えを言つ瞬間に、光を放ちなのはを抱え移動を開始したのだ。

少年 side end

なのはと少年

なのは side

私が謎の少女たちと戦つてゐる時、空から一人の少年が降りてきて、少年が私を抱きかかえて私を助けてくれました。

「ありがとうござります私たちを助けてくれて」

なのはは、少年に感謝の言葉と笑顔で、少年に伝えようとしたのだが少年は無反応だった。

「どうしよう拓真君私はこういう人苦手だよ——」

なのは side end

なのはが拓真に相談しようとした時、少年が、なのはの手からレイジングハートを奪い逃げ出したのだった。

レイジングハートを奪われたなのはは、魔法が強制解除され、地上へ落ちていくのだった。

「さやあああ」

その時地上へ落ちてゐるなのはを、助けた二つの人影だった。巣の二つの人影の正体は、神童刹那と風見悠馬の二人だった。

なのはと刹那

三人称 s.i.d.e

「助けてくれありがとうな」

なのはは自分を助けてくれた少年刹那と悠馬と話していた。

「それにしてもどうしたの？空から落ちてくるなんてや」

悠馬がなのはに、事情を聞いていた。

「それは・・・」

なのはは、その質問に対しどう答えたらいいのか、悩んでいた。

なのはの様子を見ていた刹那が、悠馬に言つたのだった。

「おいで

刹那はなのはを地上に降ろし、ナノハと話している悠馬を、急がせていた。

「あ、名前を教えてくださいあなたたちの

なのはが一人に言つたが、断れてしまったのだった。

「『J』めんねのはちやん僕たちの名前は教えられないんだ」

悠馬はそう言つと、刹那を追いかけて行つたのだった。

そして、一人が飛び去つた後なのははある重大なことに気が付いた
つたのだった。

「！－！そういうふうしてあの子達は、私の名前を知つてたの？私
自己紹介してないのに」

そしてなのはは、家に帰りソフィに拓真が誘拐されたことを伝え、
二人で、拓真救出作戦のプランを考えていた。

一方刹那と悠馬はこれからのことを考えていると、自分たちの時代
から連絡が入つたのだった。

三人称 side end

未来からの連絡

無事なのはを助けた和え綱と悠馬の元に通信が来たのだった。

三人称 s.i.d.e

「ヤツホー刹那と悠馬君時間移動出来たみたいだね」

「何だアリア？時間通信は、緊急時以外禁止されていははずだろ？」「

「何よ刹那たらそちらの時間世界に、私たちの敵対組織の一つであるゾーンが、刹那たちのいる時間に移動開始したのよ」

アリアは刹那と悠馬に伝えたのだった。

そして、アリアからの時間通信は切れて悠馬と刹那は、改めて今後の介入のタイミングを相談していた。

「刹那どいつもする気だネオデストロンの連中だけなら俺たちだけで何とかできるが、ゾーンの連中まで相手をするには、俺たち一人だけではきついぞ」

「大丈夫だ悠馬ゾーンの連中は漁夫の利が常套手段だからたとえこの時代に來てもすぐに動くことはないだろ？。もしやつらが動くとすれば闇の書事件解決直後だろ？」

「当面は俺たちはまだ動きを見せていないプレシアと、ユーノを改造したネオデストロンの動きを見張ることと、母さんからレイジングハートを奪つた少年を探すことだ」

「そうだな刹那」

そのころユーノは一人でなのはの家に向かっていると、レイジングハートを持っている少年を見つけたのだった。

「あれはなのはのレイジングハートだどうしてこの子が持っているんだ」

ユーノは何故少年が持っているのかを調べる為少年の後を追いかけ行って行ったのだった。

三人称 side end

「ユーノの新たな力

ユーノ side

僕はネオデストロンに拉致されてしまい、なのはとジュエルシードを探すことが出来なくなってしまった。そして僕の体はネオデストロンによって僕は、改造魔道師になってしまったが、脳改造される前に謎の少年が助けてくれました。

「一体あの子達は何者なんだろう」

僕は、少年たちの無事を祈りつつネオデストロンの追っ手をかわしながらなのはたちと合流する為移動をしていました。

ユーノ side end

一方ユーノを逃がしてしまったネオデストロンの首領は、部下のエビ男爵にユーノ追撃命令を出したのだった。

首領の指令を受けたエビ男爵は、自分の部下から一人を呼び出した。

「よく来たなスライム怪人のスラベーモーお前に指令を与えるこの少年を捕獲あるいは殺せ」

「了解であります」

スラベーモーは部屋を出て作戦を開始し現在へ時は進む

「ク、このままじゃ拉致があかない仕方がない戦うしかない」

ユーノは移動をやめ怪人スラベールと戦う為臨戦態勢に入つて行つた。だが

この時ユーノは知らなかつた自分の中にジュエルシードが埋め込まれてゐることに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1683v/>

デバイスになった少年

2011年10月9日13時36分発行